

平成24年度
No. 4
11月28日

全連小速報

全国連合小学校長会事務局
東京都港区西新橋1-22-14
電話 03-3501-9288
発行人 会長 露木 昌仙
編集人 広報部長 入野貴美子

「いのち」の大切さや喜び、その不思議さや重さを学び 自らの「いのち」を輝かせていくために

第64回全連小研究協議会奈良大会成功裡に終わる

平成24年10月25日(木)～26日(金) 奈良市中央体育館及び周辺会場

平城京が置かれた日本で最初の首都であり、山焼きで有名な若草山、和歌にもうたわれた大和三山など、日本の歴史を連綿と眺めてきた自然を有するとともに、シルクロードの終着点である奈良県において、10月25日(木)・26日(金)の2日間、第64回全国連合小学校長会研究協議会が全国から約3000名の参加者を得て、盛大に開催された。

本大会は、現在の研究主題の締めくくりとなる5年目、そして全連小の新たな一歩に向けた大会となる。1日目は、開会式・全体会の後、11の分科会に分かれて活発な協議が行われた。2日目には「ふるさととの絆 未来に託す夢と希望」を主題にしたシンポジウムが、魚谷雅彦氏・笛吹雅子氏・花山院弘匡氏をシンポジストに迎え、堀竹充調査研究部長の進行で行われた。

閉会式では、「ふるさと」を合唱し、感動のうちに大会の幕を閉じた。

大会主題

新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる

日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～ふるさとを愛し、夢や希望の実現に向かって、力強く歩む子どもを育てる学校経営～

開会式

- 1 開会のことば 齊藤 至 大会副会長
- 2 国歌斉唱
- 3 あいさつ 露木昌仙 大会会長
藤田謙治 大会実行委員長
- 4 祝辞 文部科学大臣 田中眞紀子様
(代読 文部科学省大臣官房審議官 関 靖直様)
奈良県知事 荒井正吾様
(代読 奈良県副知事 奥田嘉則様)
奈良市長 仲川げん様
- 5 来賓紹介
- 6 閉式

経営力と信頼を高める大会に

露木昌仙 大会会長

第64回全国連合小学校長会研究協議会奈良大会を開催するにあたり、文部科学省大臣官房審議官関靖直様、奈良県知事荒井正吾様をはじめ大勢のご来賓の皆様をお迎えできたことに厚くお礼申し上げます。

奈良県は、昨年の紀伊半島大水害、台風12号による災害等により大きな被害があった。学校教育にも影響があったことに心よりお見舞い申し上げます。

今、いじめを原因として子どもが自ら命を絶つという痛ましい事案が続き、教育界への信頼



も揺るがしている。昨日の理事会では「いじめ」にかかわる課題を話題にし、校長がこの課題に正面から向き合い、先頭に立ち解決に当たることを再確認した。いじめは、どの学校のどの学級においても起こりうるというのが基本である。全児童の状況を全職員で共有し、早期把握、早期対応を進めることで、児童・保護者の安心感、信頼感を高めることが校長の使命である。

昨年の標準法改正による小学校第1学年35人以下学級に続き、今年度から第2学年36人以上学級に加配を措置するという方法で、少人数学級編制が一步進められた。全連小活動の大きな成果の一つであるにとらえている。これまでも県単や市単予算、加配教員の弾力的活用という方法等で、自治体独自の少人数学級が実施されてきた。今年度、すでに小学校第2学年35人以下学級を実施していた自治体では、加配定数が増えなかったこともあり、不公平感を味わったところもある。しかし、小学校第3学年以降の国による少人数学級を進めなければならない。9月に文部科学省が示した平成25年度概算要求は、小学校第3学年から中学校第3学年までの35人以下学級を第2期教育振興基本計画の時期と合わせて5年で行うというものである。今年度と同じ加配定数による方法だが、どの学年から進めていくかは都道府県の判断によるところが、これまでと異なる点である。加配の措置に当たっては、指導方法改善加配を減らすなどの不公平感が起こらない配慮を強く要望していく。また、これは概算要求の段階であり、財務省を経て政府予算とすること、衆議院を通すなど、まだ高いハードルがある。教育関係23団体、子どもたちの豊かな育ちと学びを支援する教育関係団体連絡会として、11月20日に全国集会を開催するなど、小学校第3学年以降の35人以下学級実現を最重要課題とし、今後も各省、各関係議員への要望活動を強化し進めていく。

5月の総会でも話したが、7月中に各地区校

長会事務局を通して東日本大震災に関わる義援金をお願いをさせていただいた。報道等では、復興の元気な部分が報じられるが、現在でも通常の教育活動ができない学校がたくさん存在している。被災県の校長会から「全国の校長先生方に頼ってばかりはいられない。25年度からは自立し県内で考えたい。」という声も聞こえている。できる範囲で、今年度限り1回ということで義援金へのご理解とご協力をお願いする。

本大会の開催にあたり3年有余にわたる組織的できめ細かい準備、これまでの全国大会や各地区大会の成果を踏まえ発展させ着実な研究を積み上げられた藤田謙治会長をはじめとする奈良県小学校長会、近畿地区小学校長会協議会の皆様に感謝申し上げ挨拶とする。

ふるさとを愛し、夢や希望に向かう

藤田謙治 大会実行委員長

第64回全連小奈良大会に、全国から約3000名の皆様を迎えられたことは、大きな喜びである。奈良県は、200名余りの少人数会員であるが、全員の力を結集させ準備に当たってきた。

我が国は、東日本大震災などからの復興という国民的課題に直面し、懸命な努力が今も続けられている。知識基盤社会やグローバル化が加速する今日の社会は、先の見えにくい時代である。学校には経営ビジョンを確立し、確かな学力や豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育む教育が求められている。私たち校長は、自らの使命を自覚し、志を高く掲げ、活力ある学校経営に努めているところである。

奈良の歴史は、国づくりに取り組んだ先人たちの高い志や豊かな知恵を連綿と受け継いできた人々の歴史である。本年度は、香川大会以来の全連小研究主題の最終年次となる。奈良大会は、副主題を「ふるさとを愛し、夢や希望の実現に向かって力強く歩む子どもを育てる学校経営」と設定した。ふるさとを愛する心を基盤に、これからの新しい社会の形成に向け力強く歩んでいく子どもを育てる学校経営を目指していきたいと考えている。この副主題に関わって、何よりも校長自身の力強く歩んでいく姿勢が学校づくりや子どもの育成における大きな牽引力になると考える。本大会では、全国の校長先生方が様々な課題に果敢に取り組む小学校教育の在り方を力強く探究していただくことを期待している。

本大会の開催にあたり、文科省をはじめ奈良

県、奈良市そして教育関係の皆様、全連小ならびに近畿小学校長会協議会の皆様、関係機関の皆様のご指導・ご支援にお礼を申し上げます。また、本大会がご参集の皆様のお力により大きな成果を上げていただくことを祈念し開会と歓迎の挨拶とする。

田中 文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 関 靖直様

第64回全国連合小学校長会研究協議会奈良大会が、多数のご参加のもと盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。ご出席の校長各位におかれては、日頃から小学校教育の充実・発展にご尽力をいただき、心より感謝申し上げます。

我が国は、少子高齢化等の社会構造の変化に対応しながら、日本再生の実現に向けた創造力豊かな人材の育成の推進が一層求められている。このため、平成25年度文部科学省概算要求においては、未来への先行投資として教育の充実に係る施策を盛り込むとともに学校施設の復旧・耐震化や原子力災害からの復興支援など、復興対策に係る経費を要求した。特に初等中等教育関係では、12年ぶりの策定を目指す新たな教職員定数改善計画の初年度分として、5500人の定数改善を図るほか、いじめ問題等の解決に向けて調整・支援する取組を推進するなど、安心して教育を受けることができる学びのセーフティネットの構築、科学的思考力育成のための理科教育の戦略的推進をはじめとする重要施策に要する経費を要求している。今後、皆様からのご支援・ご協力を得ながら、政府としての予算編成に取り組みたい。

昨年度から小学校新学習指導要領が全面实施されている。各学校では、校長のリーダーシップのもと、新学習指導要領を踏まえた教育の実践に取り組んでいただいているが、今後とも子どもたちの生きる力の育成に向け、より効果的な教育活動の実現に向け学校を挙げて取り組んでいただくよう強く期待申し上げます。

結びに今大会が所期の目的を達成するとともに、全連小の益々のご発展を祈念しお祝いの言葉とする。

荒井 奈良県知事祝辞代読（要旨）

奈良県副知事 奥田嘉則様

今年は、奈良の地で作られた古事記が完成し

て1300年目に当たり、本県にとって記念すべき年である。この記念すべき年に第64回全連小の研究協議会が盛大に開催されることに感謝と歓迎をする。

全連小が、我が国の初等教育の充実・発展のために真摯に研究と実践を積み重ね、多くの成果を収めたことに敬意を表する。今大会では、ふるさととの関わりを教育活動の中心に据え、これまでの研究成果を総括すると伺っている。奈良の地は古来、藤原京、平城京などの都がつくられ、「日本人のふるさと」とも言われている。この奈良の素晴らしさを、次代を担う子どもたちに伝えるため、県内の小中学校では平城宮跡など郷土の素材を取り上げて作成した道徳教育、奈良県郷土資料を活用した取組を進めている。近年、少子化や高度情報化などにより、人と人とのつながりが希薄になり教育を取り巻く環境が大きく変化している。このような状況の中で本県では、学校・家庭・地域が連携して子どもを育てることを重点課題としている。昨年度から市町村長や経済界のトップ、教育長をはじめ教育関係者、PTAの代表者が一堂に会した奈良県地域教育力サミットを開催し、地域の教育力を高める方策を議論している。本大会においても、全国の小学校の校長先生方が各研究課題について熱い議論を交わし、初等教育の一層の充実に寄与されることを期待するとともに、皆様のご健勝とご活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉とする。

奈良市長祝辞（要旨）

奈良市長 仲川げん様

全国各地から第64回全連小奈良大会にご参加いただき、お礼申し上げます。

ユネスコの世界遺産にも登録された古都奈良の文化財は、地域そして世界の宝でもある。子どもたちも、この奈良で生まれ育ったことを誇らしく語れるように教育目標に掲げ、独自の世界遺産学習の取組を進めている。「教育は百年の計」というが、百年に一度といわれる混迷の時代だからこそ、私たちが地に足の着いた指導をし、長期的視野に立ってこれからの制度や教育内容の在り方について熟議することが求められる。一方、教育は答えが見えるまで時間がかかることもあり、評価に馴染まないという声もある。しかし、10年20年は、瞬間に過ぎてしまう。かつて私たちが学校で受けた教育は、ど

う生きているかの検証を行うことは重要である
と考える。

現場で先生方の指導に当たる校長の皆様は、
様々な課題をもとに日々子どもと向き合っ
ていると思う。子どもたちは、日本の宝
でありこれからの社会を担う大きな資産である。
本日から2日間にわたり様々な分野で、研修・
検討を行っていただきたい。

最後に、本大会の開催にご尽力いただいた皆
様とご参会の皆様にお礼申し上げ、お祝いの挨拶
とする。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 関 靖直様

1 教育行政の基本的方向性

本年8月、中教審教育振興基本計画部会で、
平成25年度からの第2期教育振興基本計画（審
議経過報告）を取りまとめた。年内を目途に中
教審から答申をいただき、年度内に閣議決定を
予定している。第1部の総論では、①社会を生
き抜く力の養成②未来への飛躍を実現する人材
の養成③学びのセーフティネットの構築④絆づ
くりと活力あるコミュニティの形成、の教育行
政の四つの基本的方向性を示した。

2 平成25年度文科省概算要求（文教関係予 算のポイント）

初等中等教育関係では、教職員定数の改善、
理数教育推進、全国学力・学習状況調査の実施、
情報教育の推進、インクルーシブ教育を推進す
るための予算要求をした。また、いじめ問題へ
の総合的な取組や奨学金事業の充実などの「学
びのセーフティネット」の構築等、文教関係予
算4兆5974億円を要求した。この中の最重要課
題の少人数学級の推進や個別の教育課題の対応
については、計画的教職員定数の改善（5年計
画）をもとに、初年度分として5500人の定数改
善を計上した。35人以下学級を加配措置によっ
て5年間で小3から中3までの7か年分を各自
自治体の状況に応じて学年を選択しながら実施で
きる考え方をベースにしている。また、東日本
大震災に係る復興支援として、1000人（前年同）
を要求した。

3 今後の全国学力・学習状況調査

24年度4月は、抽出と希望利用で国語・算数
に初めて理科を追加して行った。今後は、3年
に一度程度理科の実施をする。当面は、抽出
（約30%の抽出率）と希望利用方式で実施する

が、平成25年度（数年に一度）は市町村、学校
等の状況を把握できるきめ細かい調査を実施す
る。対象学年（小6・中3）の全児童生徒を対
象とした本体調査とともに、経年変化分析のた
めの調査（抽出）、保護者アンケート調査（抽
出）、教育委員会に対する調査（全数）を行う。
12月頃に詳細を報告する。

4 新学習指導要領の円滑な実施

新学習指導要領の円滑な実施においては、指
導方法や指導体制を改善し、個に応じた指導を
各学校で充実させることが重要である。特に教
育内容の主な改善事項の一つである言語活動の
充実については、各教科等の目標に即して関連付
けた効果的な指導を行い、検証もお願いしたい。

5 いじめ問題に対する取組

7月の滋賀県大津市の事案についての報道以
降、学校や教育委員会の対応について様々な批
判があった。その後もいじめやいじめを背景と
した様々な問題が起きている。文科省では、8
月1日に子ども安全対策支援室を設置し、いじ
め問題に取り組んでいる。また同日付で、「い
じめの問題に関する緊急調査」を依頼し、学
校・教育委員会の取組の緊急点検をし、現在、
状況をまとめている。学校はいじめを把握した
とき、保護者、教育委員会と適切な連携を図る
とともに、日頃からの未然防止に取り組むこと
が重要である。学校はいじめに対する毅然とし
た対応を行い、いじめられている子どもを徹底
して守る姿勢を示すことが重要である。

6 特別支援教育

共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教
育システムの理念が重要であり、その構築のた
め特別支援教育の着実な推進が必要である。同
じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別
の教育的ニーズのある児童生徒の自立と社会参
加を見据えた指導の提供と多様で柔軟な仕組み
を整備することが重要である。また、従来の就
学先決定の仕組みを改め、総合的な観点から就
学先を決定する仕組みとすることが適当である。

7 教員の資質能力の総合的な向上方策（答申）

教員の資質能力の向上のキーワードは、「学
び続ける教員像の確立」である。改革の方向性
としては、教育委員会と大学との連携・協働に
よる教職生活全体を通じた一体的な改革、新た
な学びを支える教員の養成と、学び続ける教員
を支援する仕組みの構築が必要である。教員養
成の改革の方向性として、教員養成を修士レベ
ル化し、高度専門職業人として位置付ける。

第1日 全体会

司会 巽 礼子 大会実行副委員長

- 1 本部報告
- 2 大会主題・研究課題趣旨説明
- 3 大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

小澤良一 対策部長

要望活動、各部の活動概要などについて5項目に分けて報告する。

第1に、「平成25年度小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算についての要望書」について、文科省・財務省・総務省の関係各課を訪問し、要望書を手交し要望活動を行った。文科省では、小学校長会として文部施策を後押しする声を大きく上げてほしいと期待された。

第2に、「東日本大震災復興に関わる学校教育への支援要望」についてである。4月に会長と震災対策特別委員会委員等で、仙台市において被災3県校長会との合同連絡会を開催した。国等への人的措置についての緊急要望、今後の支援策、義援金等の支援期間などについて協議した。7月には、第2回の被災3県校長会との合同連絡会を全連小事務局で行った。

第3に、「公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化」についてである。本年度の文科省の概算要求（9月）では、平成25年度から5年間で合わせて27000人の定数改善計画を策定している。全連小の意見を取り上げたものと受け止めている。今後の財務省との折衝に期待し、法の改正による少人数学級の実現等を要望していく。

第4に、三地区対策・調査研究担当者連絡協議会を、9月27日東京、10月11日大阪、12日福岡で開催した。各都道府県の担当者から、各県の状況等についての発表、意見等をいただいた。



第5に、対策部、調査研究部、広報部の各委員会の活動についてである。全連小速報2号で詳しく紹介しているが、対策部には4つの委員会、調査研究部には6つの委員会、広報部には4つの委員会があり、全連小の活動を支えている。

大会主題・研究課題趣旨説明

阪東俊行 奈良大会研究部長

奈良大会は研究主題の最終年度として、来年度の新主題で開催される大会への引き継ぎを目指し、副主題を「ふるさとを愛し、夢や希望の実現に向かって力強く歩む子どもを育てる学校経営」と設定した。現在、我が国は様々な困難な課題に直面している。このような状況の中、我が国の歴史や風土を大切に持続可能な社会や人間性豊かな社会の形成を主体的に担っていく姿勢をもち、夢や希望をもって力強く歩む日本人の育成が求められている。先行きの不透明な時代であるからこそ、学校教育においては子どもたちの将来の夢や希望、これからの社会へ期待をもつようにさせるとともに、自らも社会を構成する一員であることを自覚させ、力強く歩んでいく資質や能力を培うことが大切である。ふるさとやそこに住む人々との関わりを大切にし、ふるさとの一員としての自覚や、ふるさとを知りそれを愛する心を育てていくことは子どもたちが自分の夢や希望をもち、それらの実現やこれからの新しい社会の形成に向かって力強く歩んでいくことにつながると考える。分科会・分散会の発表については、大会主題や副主題の趣旨を生かした提言を期待するとともに、研究の道筋が確かで客観性があり進む方向性を共有できるものとしていただきたい。充実した分科会になるよう協力をお願いする。

<分科会・研究課題と研究の視点>

1 「校長の職責」

課題：先人の知恵を生かした活力ある学校づくり

視点①：地域の教育資源を生かし、子どもの活力を生み出す学校経営の推進

視点②：明確なビジョンを掲げ、教員の意欲を引き出す学校経営の推進

2 「組織・運営」

課題：組織の力が生きる学校づくり

視点①：子どもと向き合う時間を確保する学校運営の工夫・改善

視点②：今日的な諸課題への対応力を高める学校運営の組織改善と推進

3 「人事評価・学校評価」

課題：人事評価・学校評価を生かした学校づくり

視点①：人事評価を生かした信頼される学校づくりの推進

視点②：学校評価を生かした開かれた学校づくりの推進

4 第1分散会「教育課程Ⅰ」

課題：豊かな心を育む学校づくり

視点①：身近な地域の人との関わりを大切に、規範意識を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

視点②：道徳的実践力を高め、豊かな心の育成を目指した教育課程の編成・実施・評価・改善

第2分散会「教育課程Ⅱ」

課題：確かな学力の向上を目指す学校づくり

視点①：基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得を図り、課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

視点②：学ぶ意欲を高め、主体的に学習に取り組む態度を育む学習指導と評価の在り方

5 「現職教育」

課題：教職員の資質・能力を高める学校づくり

視点①：教師の意識改革を促し、実践的な指導力を高める校内研修体制の充実

視点②：教職員に自信と誇りを育み、展望や参画意識をもたせる研修の推進

6 「生徒指導」

課題：豊かな人間関係を築く学校づくり

視点①：児童理解を深め、豊かな人間関係の育成を図る生徒指導の推進

視点②：家庭・地域・関係機関等と連携した生徒指導の推進

7 「人権教育」

課題：人権を大切に、互いに尊重し合う心を育む学校づくり

視点①：自他の人権を尊重し、自律と思いやりの心を育む教育の推進

視点②：人権意識を高め、実践力を培う人権教育の推進

8 「健康教育」

課題：健やかでたくましい心と体を育む学校づ

くり

視点①：心身ともに健やかな成長を目指す健康教育の推進

視点②：望ましい食習慣・生活習慣の形成を目指す食育の推進

9 「環境教育」

課題：環境に対する豊かな感性と実践力を育む学校づくり

視点①：教科・領域等との関連を図った環境教育の推進

視点②：地域環境を生かした活動を通して実践的な態度を育む環境教育の推進

10 「家庭・地域・異校種等との連携」

課題：家庭・地域・異校種等との連携を生かした学校づくり

視点①：学校と家庭・地域等との相互理解を深める連携活動の推進

視点②：幼・保、中学校との連携を生かした教育活動の推進

11 特別分科会

第1分散会「教育課題Ⅰ 情報教育・外国語活動」

課題：自他の文化を尊重し、コミュニケーション能力や情報活用能力を高める学校づくり

視点①：豊かな表現力やコミュニケーション能力を育む外国語活動の推進

視点②：新たな情報機器を活用し、学習効果を高める教育活動の推進

第2分散会「教育課題Ⅱ キャリア教育・特別支援教育」

課題：社会的な自立を目指し、将来を切り拓く力を育む学校づくり

課題①：一人一人の発達や実態に応じた特別支援教育の推進

課題②：ふるさとを生かし社会性や自立心を育むキャリア教育の推進



第2日 全体会

司会 巽 礼子 大会実行副委員長

1 研究協議のまとめ

2 大会宣言文決議

杉澤茂二 大会宣言文起草委員長

◇ シンポジウム

研究協議のまとめ

阪東俊行 奈良大会研究部長

昨日開催した13の分科会・分散会において、研究課題や研究の視点に添った、校長の果たすべき役割と指導性について協議を深めていただいた。変化の激しい先行き不透明な時代であるからこそ、教育の不易と流行の部分を見極め、地域を越えて校長のリーダーシップや在り方について共通理解できたこと、再認識できたことなど、多くの成果があったことを確認した。協議のまとめとして、副主題の「ふるさとを愛する」「夢や希望の実現に向かって力強く歩む」などに関することを中心に報告する。

1 「ふるさとを愛する」に関して

第3・第5・第6・第8・第10・特別分科会教育課題Ⅱなどで、次のようなことを明らかにした。

ふるさととの絆を深め、信頼される学校づくりを進めるために、校長は人事評価や学校評価などをツールとして使いながら、教職員を育てていかなければならない。そのためには、学校経営能力、中でも評価力と指導力、人間性、コミュニケーション力などが重要となる。

キャリア教育の中で、地域の宝物は、結局はそこに住んでいる人であるという視点で取組をしていくことが大切であるということや、東日本大震災により被災した中で、校長のリーダーシップの下、ふるさとを再生しようという合言葉で取組をしている例が発表された。

2 「夢や希望の実現に向かって力強く歩む」に関して

第2・第9・特別分科会教育課題Ⅰなどで、次のようなことが確認された。

児童の成長のため、保護者や地域の関係団体等の協力を得て、有効に機能する組織づくりをするためには、校長のリーダーシップの下、ミドルリーダーの育成や協働的な人間関係、役割の明確化、校務の効率化を推進していくことが必要である。また、教職員の教育力を高めるには、校長が教職員と向き合い、よいところを見つけて伸ばさせていくことが必要であり、そのことによって子どもを変えていくことができる。

一方、課題としては、若手教員の育成、ミドルリーダーの育成、若手教員にどう参画意識をもたせるか、年配教員にどうやる気を起こさせるかなどがある。その対応としては、退職教員の活用、校内教員の専門性を生かした研修、相互授業公開等で教育力を育成するなどが考えられる。

3 分科会の運営について

北海道大会以来の流れを受け、参加型の運営を基本にした。座席表の配付やOHCでアナライズカードを挙げている様子を映すなどの工夫をし、発表内容や柱に沿った討議と各学校の取組の情報交換のバランスも考えた。グループ討議は6人程度までが話しやすく、活発に行われた。また、机がない会場で、椅子のみで膝を交えて討議するものよいものであるという感想もいただいた。

4 課題について

- ① 発表内容に副主題や研究の視点をより生かすこと。それにより、討議が焦点化され、深まるとともに、校長としての在り方がより明確になると考えられる。
- ② 各都道府県において、発表内容に吟味を加えておくこと。その際、目標達成のための学校経営の視点や校長の姿勢をより鮮明に盛り込むことが望ましいと考えられる。
- ③ 奈良大会での成果を各都道府県で広めていただき、各学校での学校経営に生かしていただければありがたい。

本大会の成果と課題を、新しい大会主題の下で開かれる、来年の三重大会に引き継ぎ、より一層大きな成果が得られることを祈念して、奈良大会の研究協議のまとめとする。

大会宣言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を積み重ね、着実にその成果をあげてきた。

第60回香川大会以来、「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題に掲げ、最終年度となる奈良大会に至る5年間にわたって、その実現を目指しながらさまざまな取組を進めてきた。

現在、我が国は東日本大震災など大きな災害からの復興、地球規模での環境問題、変化が激しく先行きが不透明な社会への移行等、多岐にわたる課題に直面している。見通しがもちにくい時代の中、これらの諸課題を乗り越えていくためには、知性とともにとくましさや思いやりの心を備えた子どもを育成することが学校教育の責務である。

私たちには、それぞれに心に刻まれたふるさとの姿がある。このふるさとを愛する心を育てることは、ふるさととの絆を実感し、未来に向かって夢や希望をもち、たくましく歩む原動力になるものと確信する。

私たち校長は、奈良大会における副主題「ふるさとを愛し、夢や希望の実現に向かって力強く歩む子どもを育てる学校経営」を基盤に据え、小学校教育の推進に全力を傾注することにより、国民の信託に応えようとするものである。

ここに第64回全国連合小学校長会研究協議会奈良大会の総意に基づき、次の決意を表明し、その実現を期する。

記

- 一、新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成
- 一、ふるさとを愛し、夢や希望の実現に向かって力強く歩む子どもの育成
- 一、「生きる力」を育む創意工夫ある教育課程の編成・実施・評価・改善
- 一、道徳教育を中核に据えた心の教育の一層の充実
- 一、災害に際し主体的に行動する態度を身に付けた子どもの育成を目指した防災教育の推進
- 一、学校の自主性・自律性の確立と家庭・地域社会との連携による教育活動の充実
- 一、安全で安心できる教育環境づくりと子どもの居場所づくりの推進
- 一、確固たる経営方針に基づく活力ある学校経営の推進
- 一、校長自らの研鑽と教職員の資質能力の向上を図る現職教育の充実

右、宣言する。

平成24年10月26日

第64回全国連合小学校長会研究協議会奈良大会

シンポジウム

『ふるさととの絆 未来に託す夢と希望』

(要旨)

シンポジスト

株式会社ブランドヴィジョン代表取締役社長

魚谷雅彦氏

日本テレビ放送網報道局社会部 キャスター

笛吹雅子氏

春日大社 宮司

花山院弘匡氏

コーディネーター

全連小調査研究部長

堀竹 充



堀竹 シンポジウムを進めるにあたって、「今の私」「ふるさととの絆」「未来に託すこと」、この三つのテーマで御三方からお話を伺ってみたい。

花山院 春日大社の宮司になる前、20数年、高校の教師をしていた。父も、やはり 20数年教



師をしていて、春日大社の宮司になった。これも、花山院家というご先祖様の関係である。春日大社は、国家国民の幸せをお祈りするための神社であり、昨年の東日本大震災以来、東北の復興を願う祝詞

の奏上は、56,800回を超えている。普段はこのような活動をしている。

転機ということでは、先代の春日の宮司が体調を崩して、神主の資格をもっている私に急に声がかかった。先々代の宮司である父が現職で亡くなるまでの後ろ姿を見ていて、私には荷が重いと思っていたのだが、多くの人の勧めもあり跡を継いで宮司となった。原生林があり、人と鹿が共生している奈良という地域で心が育まれたこともあり、この務めを引き受けさせていただいている。

笛吹 大学の時、いろいろな人に会い、いろいろな場所に仕事で行けるという好奇心を満たしたいがために、アナウンサーを志望し、日本テレビに入社した。当時、4人の新人アナウンサーが入ったが、研修中は関西弁が抜けないために、私一人居残りが続いた。



そんな私の転機は、一つは阪神淡路大震災だった。その時、取材担当ではなかったが、強引に取材に行かせてもらった。震災から4日目のことだった。大学時代を過ごした街の変わりように、初めて腰が抜けるという体験をした。その時、現場で見てみないと、実際に話を聞いて

みないと得られないことがある、見ていないことは、知らないことだと思った経験をした。

もう一回の転機は、当時料理番組を担当していた私が、ニューヨークのビルに飛行機が突っ込んでいく光景を見たことである。その時、テレビは、今世界で起こっていることを、今伝えられるのに、私はスキルがないから、戦力にならなかったと思った。そこで、報道局に異動することを決めた。

現在、東日本大震災の後も東北に通い続けており、暮らしと命はこれからもこだわっていきたくて考えている。

魚谷 私は高校時代から英語が好きになり、大学時代は留学をしたいという気持ちが強くあった。就職も留学制度があるということで、ライオンという会社に入った。留学したいと言い続けていたら、早い段階で機会をいただき、アメリカに行き、ビジネススクールに入った。

そこで、私が得たものは、一言でいえば「生き抜く力」である。全く文化的な背景の違う30数か国の人間が、一つのクラスの中で議論をする。そこで要求されるのは、クラスの皆に対して自分の意見を披露することで、いかに全体の考え方に貢献するかということだった。その後日本に帰ってきて、縁あって日本コカ・コーラという会社で仕事をした。いわゆるグローバル企業で、極めて多様な組織体である。

ここで私が学んだことは、技術や商品が良いことは重要だが、世界中の人の心をつかむのは、ここに感性の価値・情緒の価値がしっかりとあるから、人は気持ちを動かされるし、好きになるし、人にも勧められるということだ。この視点で見たとき、日本企業の多くは、これだけグローバル化を迫られている中で、そういうところが弱い。そこで、日本の企業の経営者の考え方をええたり、新しいモデルを導入していただいたり、あるいは若者への啓発活動を行ったりする会社を作った。



グローバルな企業競争の中で、必然的に世界に目を向けなければならない時代になっている。具体的には、英語を標準語として現地の人をよく知り、世界のいろいろな企業と協調したり、競争したりしていかなければならない。

この時に二つのことが重要である。一つは、自分を主張できる能力を開発していく一方で、その場に自分がいる理由として、日本人の「絆」「ふるさと」、日本人としての価値観・誇りというものをしっかりもっておくということがより重要になっていくと思う。

笛吹 震災の時も、日本の中で姉妹都市の人たちが助け合ったということもあるが、そういう「ふるさと」をもっているとほかの場所の「ふるさと」にも思いが馳せられるありがたい存在なのではないかと感じている。

花山院 奈良には877年続いている「御祭り」がある。この祭りを守る方々は、祭りに奉仕することが心の絆の中心にある。そういう祖先から受け継いだエネルギーがふるさとの力につながってくる。日本の力に誇りと自信をもってほしい。それは世界につながる扉の入口ではないかと思っている。

神社というところは、子どもからご高齢の方までが集まる場所である。小さな集まりから、大きな集まりまで、年齢を越えて集まり、笑顔でお参りをされる。その中で、年配の方のノウハウを若い方に自信をもって、頑固に伝えていくことが大切であると考えている。未来や地域・学校が縮小していく中、本当に大切なものを見直すという機運は上がってきている。その中心となるのは、地域の中で学区がはっきりしている小学校か中学校である。

笛吹 最近、会社に入りたい若い人たちと話をしている、同じような内容のことを話す人が増えている。入るためのノウハウだけを仕入れている感じで、もっと先の楽しい目標がもてていないと感じる。実際に見聞きする機会を増やして欲しい。シンプルで、ベーシックなことだけでも、興味があってもなくても、自分で見て、聞くということを大切にしたい。

魚谷 小学校という段階でも、日本の次世代の方のために役に立ちたいと思っている企業人は

たくさんいる。そういう方々の体験談を聞くとか、知識や技術を見せてもらうだけでもいい社会勉強になると思う。

また、先生方の人間力、人間的魅力が生涯にわたる影響を与えられる素晴らしい職業であるので、ぜひ一生懸命取り組んでいただければと思う。

堀竹 最後に、学校・教師・子どもへのメッセージをお願いしたい。

花山院 よく形と心では心が大事というが、これは逆で、形の中には、先人の知恵が詰まっている。昔のものを大切にし、それを未来につないでいくことに教育の原点をもっていたきたい。

笛吹 今、世の中で起こっていることを、鵜呑みにしないで、本当にそうなの、と疑ってかかること、その人の意見は認めたくなくて、自分はどうかと考えることが私たちの仕事で大切なことである。ぜひ、これは当たり前だと思わないで、でも否定だけするのではなくて、建設的なものをもつということを増やして欲しい。

魚谷 アメリカ留学の際、夜に「デール・カーネギー・スクール」という学校に行き、そこで教えられたことは、一つは「人の話はよく聞け」ということ。二つは、最後の授業で先生が言ったことで、「君らがここに来た理由は、企業のリーダーとして効果的なコミュニケーションをして組織を動かしたい、人を動かしたいということだろう。そのために一番重要なことは、テクニックでも、話し方でもない。それはあなた自身が情熱をもって生きているかどうかだ。そのことが重要なコミュニケーションなのだ。」という言葉だ。これは、これまでの私の企業経営の上での信条となっている。

閉 会 式

- | | | |
|---|--------|---|
| 1 | 開 式 | |
| 2 | あいさつ | 露木昌仙 大会会長
藤田謙治 大会実行委員長
稲垣 隆 次期開催県代表 |
| 3 | 閉会のことば | 加藤博之 大会副会長 |

第212回 理 事 会

10月24日（水）午後1時45分開会

ホテル日航奈良

進行 福地 庶務部長

- 1 開会のことば 加藤 副会長
2 会長あいさつ（要旨） 露木 会長

5月の東京での第211回理事会以来5か月が経過した。この間、いじめが原因で中学生が自ら命を絶つという痛ましい事案が起り、それが連鎖するという状況が発生している。文部科学省はもとより、各都道府県、各市町村教育委員会等においても様々な対応がなされていることと思う。文部科学省からは9月5日に「いじめ、学校安全等に関する総合的な取組方針～子どもの『命』を守る～」が出されたが、学校だけではなく家庭や地域も一丸となって子どもの命をしっかりと守っていく強い姿勢を示していくことが重要だと感じる。とにかく、早期発見、早期対応、継続的指導はもちろん、いじめはどの学校や学級でも起りうるというスタンスで対応していくことが大事である。子どもの命を守ることは私たちの最も重要な責務であるから、しっかりと取り組まなければならない。

さて、5月以降で考えると、中教審等の動きが大変活発で、答申・報告等が数多く出された。その1つが、8月28日の中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」である。自己の資質能力向上のために常に学び続ける姿勢が教員には不可欠であるという点から、基礎免許・一般免許・専門免許という免許制度、教員の修士レベル化に基本的に合意したということかと思う。現在では、さらに「教職課程の質の保証等に関するワーキンググループ」「修士レベルの教員養成課程の改善に関するワーキンググループ」が設置され、具体的にどう進めていくかが検討されている。

次に、7月23日には、初等中等教育分科会から、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」についての報告がなされた。その中で、障害のある子どもが、十分な教育が受けられるようにすること。可能な限り共に学ぶことができるよう配慮すること。障害者理解を推進するとともに、就学先等について本人・保護者の意見を最大限尊重して決めていくこと。このような点が特にポイントになるかと思う。全連小とし

ては、方向性について基本的に賛同しているが、様々な条件整備が必要であるという点について、今後の進捗状況を見守るとともに、要望もしっかりと行っていくつもりである。

第3に、「第2期教育振興基本計画について」の審議経過報告が8月24日に中央教育審議会教育振興基本計画部会からなされた。平成25年度からの本計画をどのように進めていくかについて議論されたものである。示された4つの基本的方向性のうち、「社会を生き抜く力の養成」、「絆づくりと活力あるコミュニティの形成」の2つは、特に小学校教育等に関わりが深いところであると感じる。また、「自立」「協働」「創造」という3つのキーワードが示されているが、校長会としても、これらを念頭に置いて、いかに4つの基本的な方向性に繋げていくか具体的に提言していく必要があると思う。

第4に、「少人数学級の推進など計画的な教職員定数の改善について」（～子どもと正面から向き合う教職員体制の整備～）の報告が9月6日に公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化に関する検討会議からなされた。教職員定数については、平成25年度の文部科学省の概算要求の中で、今後の在り方が示されたと思っている。国の責任において、35人以下学級を小学校3年生から中学校3年生までしっかり進めることが大事だと考える。これに関わり、少人数学級のさらなる推進と教職員定数改善を求める全国集会を、11月20日に国会近くの星陵会館で開く。協力をお願いする。

次に、東日本大震災に関わる被災県の状況等について、今年度になり2回ほど宮城県、福島県、岩手県の校長会の皆さんと連絡会をもった。マスコミでは復興が進んでいるような報道をしているが、実際には依然として厳しい状況が続いているところも多い。全連小としては、今後も息の長い支援を続けていく。

最後に、明日から2日間の大会が大成功に終わるよう祈念し、冒頭のあいさつとする。

3 報告 司会 齊藤 副会長

- (1) 会務・事業・活動の大要 福地 庶務部長
(2) 会計 坂野 会計部長
・基金管理状況 ・負担金納入状況

- (3) 研究大会について
- ・奈良大会について 藤田 奈良県会長
 - ・三重大会について 稲垣 三重県会長
- 開催日：平成25年10月17日(木)・18日(金)
- 副主題：「豊かな未来を切り拓き、夢に向かい、共に生きる子どもが輝く学校経営の推進」
- (4) 要望活動について 小澤 対策部長
- ・平成25年度小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算に関する9項目の要望事項
 - ・「公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化」についての意見表明
- (5) 東日本大震災について

横沢 岩手県会長

校長会として、被災当初から内陸部と津波被害地域との横軸の支援体制、学校間連携を図ってきた。当初の物の支援が、現在は心の支援、交流へと移行。校長間での支え合いも心強い。

授業や行事は徐々に通常に近づいている。また、仮設校舎建設で複数校の間借り状態が解消された状況がある一方、校庭に仮設住宅が建ち並び、運動場確保が難しい学校もある。仮設住宅の子どもたちのストレス、スクールバス使用による生活時間や添乗教員の勤務態勢への影響、不安定な雇用状況による就学援助対象児の急増等も大きな課題。現在、県教委が策定した復興教育プログラムに基づき教育活動を進めているが、真の復興には、まだ長い時間がかかる。

- (6) その他
- ・海外教育事情視察報告 加藤 視察団長
 - ・日韓教育文化交流報告 露木 会長

4 情報交換「いじめについて」

(各都道府県の対策・対応等について)

司会 加賀爪 常任理事

情報交換資料による東京都等の対応例の紹介の後、10グループに分かれて情報交換を行った。

[1グループ] ・早期発見、早期解決のための日常的な見取りの強化・研修の充実・カウンセラー活用・いじめへの意識を高める教育・市内小中児童生徒代表者会議設置・専門の対策チームの設立 等

[2グループ] ・実態調査による状況把握・管理職対象の研修・学校全職員での事案認識・保護者への意識付け・各地区での小中高校生代表

者による交流と意見交換 等

[3グループ] ・教員研修と教委による管理職面接・PTA組織、関係機関との連携・児童指導専任教員の配置・スクールサポーターの増員・日記帳にいじめ相談ページを新設・校長によるポスター作成 等

[4グループ] ・教委による小中全校長へのアンケート再実施・保護者アンケート・児童と保護者に向けた知事と県教委連名のメッセージ発行・全日中のいじめ撲滅の文書を小学校にも配布 等

[5グループ] ・いじめ防止プログラムの具体的実施・アンケート調査・相談体制の確立・研修・全中学校へのスクールカウンセラーの配置・始業式での校長宣言・校長会としての対応・行政との連携 等

[6グループ] ・いじめから子どもを守るための緊急対策会議の設立・各校のいじめ防止担当者を中心としたチームづくり・スクールカウンセラー等の充実・いじめ対策調査研究事業の立ち上げ 等

[7グループ] ・QUアンケートの実施に係る予算化(子ども個々の自己肯定感や集団づくりの上での人間関係がよく分かる) *その他、関連アンケートを実施する際の記名、無記名について 等

[8グループ] ・知事と教育長がいじめ窓口(知事には電子メールで、教育長には設置ポストで)・子どもの見守り活動に関するコンビニエンスストアとの協定(警察通報、いじめ防止のポスター掲示等) 等

[9グループ] ・いじめ防止プログラム作成・保護者向けアンケートの実施・いじめの早期発見と未然防止の事例集作成・各校代表者によるいじめゼロ子どもサミットの開催 等

[10グループ] ・毎月1日を「人権を守る日」としていじめの点検等を実施・毎年4月と9月を「いじめ防止強調月間」として学活や道徳で人間関係等を重点指導・地域や学校に対策会議を設けて対応 等

5 連絡・その他

(1) 広報部より 入野 広報部長

- ① 全連小刊行図書の見直しとお詫び
- ② 教育研究シリーズ等の購読協力依頼
- ③ 教育研究シリーズ(51集)の情報提供

(2) その他

6 閉会のことば 加藤 副会長